
苦悩の工藤新一

あざらし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

苦悩の工藤新一

【Nコード】

N2879T

【作者名】

あざらし

【あらすじ】

新一が、コナンになって10年が経った。

コナンは無事組織を潰し、元の体を取り戻した。

しかしもうすでに新一の体にはAPT4869の毒が回っていて・
・。

プロローグ（前書き）

がんばります。

シリアスだと思います W

プロローグ

「はっ・・・はぁ・・・」

荒い息を繰り返す。

もう、あの頃には戻れないのだ・・・。

苦しい。

息ができない。

どうして・・・。

どうしてだよ・・・蘭・・・。

立ってもいれなくなり、どさつとその場にしゃがみこんでしまう。

もう・・・忘れちゃったのか？

オレは覚えてる。

おめえと一緒に小学校から高校まで登校したこと。

近所を探検に駆けずり回ったこと。

トロピカルランドへいったことも・・・。

コナンになってからもオレはおめえのすぐ近くにいたのに・・・。

オレが悪かったことはわかってる。

ただ・・・。

このことはあいつには内緒だ。

これ以上人を巻き込むことはできない。

オレはもうすぐ死ぬのかもしれない・・・。

プロローグ（後書き）

新—ごめん—!!—
>
<

APT X 4 8 6 9 の毒がオレを襲った。
(前書き)

A P T X 4 8 6 9 の毒がオレを襲った。

「A P T X 4 8 6 9 の解毒剤ができたわ」

思考停止・・・・・・・・。

「・・・・・・・・マ、マジで!!?」

＊

オレが元に戻ったのは3ヶ月前。

オレが毛利探偵事務所を出たのは9ヶ月前。

コナンが16になったとき、オレはコナンでいる限界を感じた。

もう、これ以上蘭を騙し続けることはできない。

しかも、そのとき組織が大きく動き出した。

オレやは、死ぬ覚悟で組織と戦うため蘭や小五郎、少年探偵団に別れをつげた。

そして無事、組織は倒すことができた。しかしその代わり、オレは全治3ヶ月の怪我を負った。

生きられたのだからよかったのだと思っていたが・・・。

哀はその間約6ヶ月をかけて解毒剤を作った。

薬をつくった早さにくらべれば異例の早さである。

オレはそう、3ヶ月前今すぐ蘭に会いに行こうと思った。

しかしそれはできなかった。

A P T X 4 8 6 9 の毒がオレを襲った。

A P T X 4 8 6 9 の毒がオレを襲った。(後書き)

なんかややこしくてすみません＞＜

更新がんばります！

短っ！！

鏡で自分の姿を見たとき、コナンのときの日々を思い出さずにはいられなかった。

「なんだ？ 灰原。いいたいことって……。」

軽く博士に会釈してからソファに座る。

目の前にはグレーのVニットを着た灰原がいた。

「工藤君。コレを見て。」

彼女の手の中には、2錠のカプセルがあった。

「APTX4869の解毒剤ができたわ」

思考停止……。

「……マ、マジで!!?」

オレには予想できなかった。唐突だ。

もちろん解毒剤ができるのを心待ちにはしていたが、早すぎた。

灰原が徹夜で薬を作っていたのはなんとなく感じていたが、まさかここまでとは。

＊

カプセルを、握り締めた。

鏡で自分の姿を見たとき、コナンのときの日々を思い出さずにはいられなかった。

少年探偵団のあいつらと何回も死にかけながらも事件を解決していた。

「手紙、送るって約束したよな……。いつかは本当のこと、いうよ。」

コナンになったことで、服部とも知り合うことができた。

「このこと、おめえに一番に報告すつから……。」

蘭。今までずっと待たせてきた。でも……。やっと会える。

なんともいえぬ嬉しさがこみ上げてきた。

口の中にそれを、放り込む。

水を飲み始めた。

しばらく、効果は出なかった。

しかし、だんだん気分が悪くなってきた。

「……そろそろなのか……?」

ついには、ベッドに横たわらないと耐えられなくなる。

とたん、心臓がドクン、と波打った。

来た・・・・・・・・。

その心臓の痛みは、コナンのときしょっちゅう戻っていたので慣れていた。

途中、気を失いそうになる。

目を覚ますと、工藤新一の体に、オレはなっていた。

実感が湧かない。

今にも飛び上がりたいくらいだったが、それはできなかった。

元にもどったらすぐ蘭や服部に言って、告白・・・するつもりだったのに。

体が動かない。

なんで？

もう、戻ったのに・・・。

血の気が引いていく気がする。

体温が下がっていく感覚。

汗はでてるのに、体は冷たいことに気づいた。

再び、オレは気を失ってしまった。

蘭じゃなかった。その事実に対し驚きと照れを感じながらも突然現れた頭痛に耐
かすかに誰かの声が聞こえる。

オレを呼んでるのか・・・？

誰だ・・・？

蘭・・・？

蘭、オメーがオレを呼んで・・・

視界が広がっていく。

2つの顔が浮かんで見えた。

「蘭！！」

そこにいたのは、哀と博士だった。

眉間にしわをよせている。

「工藤君・・・夢でも見てたの？それより・・・大丈夫？」

蘭じゃなかった。その事実にし少し驚きと照れを感じながらも突然現れた頭痛に耐えていた。

なんで、蘭なんて思っただろ・・・。

告白することかずっと考えてたからか・・・。

「大丈夫・・・。ちょっとショックが大きかったただだよ・・・。」

「しかしのー・・・まだ顔色が悪いようじゃし・・・。」

「とりあえず体温計るから、ちょっと待ってて・・・。」

哀が席を立った。

オレは、さっきから感じていた疑問を哀にぶつけた。

「なあ・・・おめーは元の姿にもどらねーのか？」

少し間があった。

哀はオレに背を向けたまま答えた。

「あなたがこんな状態になったあと、すぐ薬を飲むのは気が引けるでしょ・・・。でも、あなたがこうなったのはたぶんあなたが何度も試作品を飲んで少し耐性ができたせいで戻るのにその分体力を使ったからだと思うわ・・・。大丈夫、元の姿には戻るつもりよ・・・。」

なぜか、安心してしまった。
1つ、ため息が漏れた。

蘭じゃなかった。その事実に対し驚きと照れを感じながらも突然現れた頭痛に耐

みじかー

蘭のことを考えなきゃ、痛みでどうかしてしまいそうだ（前書き）

違います。風邪じゃないです W W

蘭のことを考えなきゃ、痛みでどうかしてしまいそうだ

体中がなぜだか痛い。

その痛みはときに耐えられないほどのものになる。

・・・そんなこと、志保に知られてはいけないとわかっているが、弱い心が電話に手を伸ばさせる。
ダメだ。

本来は蘭にあって話すはずだったのに。

そういや・・・。

あいつにまだ返事もらってなかったな・・・。

目を伏せた。

蘭のことを考えなきゃ、痛みでどうかしてしまいそうだ。

あれからもう3ヶ月もたったのに。

＊

突然のチャイム。

「あー誰だよ・・・」

ふと、あいつの顔が頭をよぎった。

蘭か？ いやもし宮野だったら・・・。

この状態をごまかせる自信はない。

でも出なかったら怪しまれるよなア・・・絶対。

重い体を引きずって「はい、工藤です・・・」と答えた。

「新ちゃん？」

げ・・・げ・・・げげげ・・・

即座に通話状態から切った。が、もちろん有紀子は鍵をもっていた。

「ただいま、新ちゃん！」

「久しぶりだな、新一」

「と、父さんもいたのか・・・」

鍵もってんなら自分であけろよ・・・。

とりあえず、風邪でしばらく通そうと思った。

その瞬間、自分が体調が悪かったことを思い出す。

額に汗がにじむを感じた。

ひざから倒れそうになるのを必死にこらえて、ソファに手をつく。

風邪であることを伝えて、すばやく部屋にもどろう。

頭がまた割れるように痛くなってきた・・・。

力なくソファに倒れこむ新一をみて、さすがに優作は異変に気がついたようだ。

「どうかしたのか？ 新一」

オレは、額に手をあてて、「風邪ひいた」とつぶやいた。

少し、予感めいたものはあったのだろうと思う。

蘭のことを考えなきゃ、痛みでどうかしてしまいそうだ（後書き）

みじかあ

「はあ？してみただけって・・・そういえばあなた最近テレビでみないけど・・・」

この症状が、副作用ではないかと疑いはじめたのは、つい最近だった。

急な発熱。激しい頭痛、関節痛、眩暈・・・。

その日によって症状はいろいろだったが、さすがに食べ物のがのどを通らず、ほとんど寝ていた状態だった。

ホントは蘭にすぐ告白しようと思っていたのだが・・・一度外に出たことがあるが、倒れそうになり断念した。

はじめはなにかの病気じゃないかと思った。ただ単にインフルエンザとか・・・。

「3ヶ月続くとなるとな・・・」

副作用だと思ったのは、オレがコナンのとき一時的に新一の姿に戻るときの痛みを感じたからだ。

副作用・・・

APT X 4869・・・

宮野は・・・？

オレはいてもたってもいられずベッドから飛び起きた。

電話に手を伸ばす。

もし宮野も同じ症状に悩まされているのだとしたら・・・副作用で
確実だろうが・・・。

あいつがあんなに「完璧」といってわたした解毒剤だぞ・・・？

でもあいつには副作用がなかったとしたら、これは病気なのか・・・？

いや・・・あの痛みは独特のものだし・・・。

あーもうわかんねえ・・・

結局、ベッドに寝たまま電話することにした。

しばらくのコール音のあと、「はい、阿笠です・・・」という落ち
着いた女性の声がきこえた。

「お、おお・・・宮野か・・・？」

オレは、できるだけ体調が悪いことに気づかれないようにした。

「なに？工藤君？なんのようかしら・・・」

あいつは大丈夫そうだな・・・。

「あ、いや・・・その博士は今いないのか？・・・ごほっ・・・」

「いや、いるけど・・・かわってほしいの？」

「や、いいよ。ちょっとしてみたただから・・・けほっけほ・・・」

力なく咳がでる。

「はあ？してみた فقط・・・そういえばあなた最近テレビでみないけど・・・。暇なの？探偵事務所のあの子はどうなったのよ・・・。風邪もひいてるみたいだし」

「難事件の調査してるに決まってるだろ・・・んじゃ、またな・・・」

オレのほうからきった。

これ以上話しているとヤバイ気がした。

宮野はなんともないんだっただけ……。

なんでオレだけ……？

単に体が弱いのか？

でもオレは小さい頃から研究室にこもってたあいつと違ってサッカーもやってたし……。

副作用だとして……。

これに宮野が気づいたらどうなるだろうか……？

あいつのことだから、ぜんぶわたしのせいよ……！！なんていつて自殺しそうだな……。

ガチャリ。

「新ちゃん！大丈夫なの？？」

なんだ。母さんか・・・。

「熱があるのか？」

父さんまで・・・。

「たいしたことないよ……。もうガキじゃねえし……」

その言葉を聞いていたのか聞いていないのか、2人が近づいてきた。

「ハイ」

有紀子が、体温計をわたす。

「しゃーねーな……」

計ろうとした時、ふと有紀子が声をあげた。

「そーいや、新ちゃん！結婚式はいつなの？？」

・・・まったくこの母親は……

「そんなじゃねーよ……」

「ロンドンで蘭ちゃんに言ったんでしょ？」

……。いつの話だよ……。

「言っただけど……。」

思わず背を向けた。

「よね！よかった！蘭ちゃんええと……新井出先生に奪われちゃったのかと！」

「え？」

「有紀子」

優作がおさない子供をしかりつけるような声で言った。

「新井出先生と？」

胸がドクンと鳴った。

「え、ええ。この前蘭ちゃんと会った時、かっこいい年上の男の人と談笑してて……。そのとき名前をきいたの。あの雰囲気は……。」

「……。」

目を瞑りたくなった。

そんな……こと……。

「有紀子・・・」

優作が、もう一度押しとどめた。

「・・・まあ、そんなはずはないわよね！蘭ちゃんは新ちゃんのだし・・・！忘れたほうがいいわよ。わたしがいったんだけど・・・」

優作が少しため息をついた。

余計なことを・・・ということだろうか・・・？

動機が激しい。

目の前が見えなくなった。

…だよな、10年も昔にいた男のことなんて、忘れるよな……。 (前書き)

テストが嫌です。

…だよな、10年も昔にいた男のことなんて、忘れるよな……。

その夜は、ずっと布団にもぐっていた。
ただショックで、どうしようもなかった。

確かめるしかない。

今まで探偵やってきたんだ、その経験を利用しないでどうする？
考えこんでたせいかさつきから頭はガンガンするが、慣れているし
歩ける、と思った。

何かの間違い。

蘭と新井出先生が……

なんて。

両親に気づかれず家を出るのは容易だった。

職業柄、こんなこともあるのかと裏出口を探しだしたのだ。（父さ
んが締め切りを逃れるために作ったんだろう……）

探偵の仕事のひとつ、張り込みだ。

オレは手ぶらで探偵事務所に向かった。

ふと不安がよぎった。

まさかもう結婚してるなんてこと……。

ま、まさか……………。

これには、自分で首を横に振るしかなかった。

長すぎたのだろうか、10年は…。

今までずっと一緒にいたオレらにとって…………。

すこし、足音が聞こえた。

オレはすぐに反応する。

だれかが降りてくる。

蘭？

すこし、近づいてみた。

いや、2人だ。

蘭とおっちゃんか？

それとも蘭と……。

笑い声が聞こえた。

心臓の音がうるさい。

汗が滲み出た。

由紀子の声が耳で反芻している。

うるさい、うるさい、うるさい……………。

一人は蘭だった。

隣にいるのは……

ホントはうすうす感じていたことなのだろうか・・・。

でも、世界が霞んでえる。

絶望感が押し寄せた。

蘭のあんな幸せそうな顔、みたことがない…。

新井出先生か…。

…だよな、10年も昔にいた男のことなんて、忘れるよな……。

やべ、近づいてくる…。

でも、体が重りをつけられたように動かなかった。

まだ蘭達をみてる。

蘭の瞳が、わらったまま、ずっとオレのほうにうごいた。

時間が、止まった。

蘭の顔が歪む。

驚きを隠せないようだった。

しばらくオレを驚愕の目で凝視していた。

先生が、何か言ったようだ。

蘭は少し口を動かして、笑顔を作った。

だが、その顔は完全にさっきとは違っている。

心なしか手が震えているようだった。

オレに背を向けて歩く足も、おぼつかなかった。

…だよな、10年も昔にいた男のことなんて、忘れるよな……。 (後書き)

シリ阿斯むずい (；_；
O₁)

2人をオレと蘭に重ねた。

「工藤君、今日も完璧な推理だったわね」

「いえ・・・そんなことないですよ・・・」

歩くことで精一杯だったが、これをするしかなかった。

頭がガンガンする。

時々こらえきれずに額に手をあてた。

佐藤警部補や高木刑事にはばれないように・・・。

だが、さすがにずいぶんとやせたことや、顔色が悪いことには何度も心配されたものだ。

「10年ぶりだから」とか「ちよつと風邪気味」となにかごまかした。

久しぶりに、事件を解決した。

とはいっても、これまでのように堂々とその推理をみせていたわけじゃない。

そんなことしたら・・・

もしばれちまったら・・・。

あいつの姿が浮かぶ。

「工藤君？」

目の前に、佐藤警部補の顔があった。

「どうかしたの？ やっぱり、調子わるいんじゃない・・・。車で送るわよ」

「や、いいです。だいじょうぶですよ・・・一人で帰れます」

彼女は、微笑んで「そう」、とうなずいた。

少し、胸にひっかかるものがあった。

高木刑事とはなす彼女を見つめる。

唇を噛み、目線を下に移動させた。

2つの複雑な感情が押し寄せる。

2人をオレと蘭に重ねた。

いったい、どんな顔してるんだろう。

今、蘭は何を思ってるんだろう。

新井出先生と・・・。

高木刑事の顔が、オレから先生に変わる。

＊

母さんと、父さんの姿はなかった。

ポケットを探り、携帯電話を取り出した。

メールのマークが光っている。

『 2人で買い物行って来るね。

ご飯どうする？

有紀子』

新一は、なれた手つきで指を動かした。

『わかった。』

『ご飯は適当に1人で食べるからいい。』

指が止まった。

オレ、もしかしたらaptx4869の副作用がでていて・・・
死ぬかもしれないん

消去。

誰かに知ってほしい。

同情なんていらなから、ただ・・・。

なに考えてんだオレ・・・。

やっぱりおかしいのかもな。

どこか。

早く寝よう。

「Your best friend」?

強がってても、

わかるよ。すぐにね。

今は遠く離れていても。

その想いは届いてるよ。

＊

ベットに寝転がったまま、ヘッドフォンをはずした。

両親の足音が聞こえたからだ。

「新ちゃん? 音楽聴いてたの?」

「ん、まあな」

有紀子が、意外そうな顔をした。

「へえー。新ちゃんも聞くんだ。そういうの。音楽に関しては全く興味ないかと。」

「悪いかよ」

「倉木麻衣か」

「綺麗な人だからな」

「ちょっと、優作ったらそんなとこしか見てないの!？」

優作は、ハハハと笑った。

彼女の曲は、たまたま聞いたものだった。

「Your best friend」

両親がなんのために来たのか、ずっと話しているが、その声もだんだんと薄れてきた。

蘭。

瞼が重たくなる。

おめえとオレはずっと幼なじみだった。

先にオレがおめえを好きになった。

蘭も・・・たぶん。

前までは。

・・・いつも当たり前のようにそばにいたけど。

だから、決めたよ。

心は同じだって、信じるから。

オレから、会いに行く・・・。

「**Y o u r b e s t f r i e n d**」？
(後書き)

実は(?) 倉木麻衣ファンです
W W

「まあまあ、新一君もそろそろ大人になってきたということじゃろう？」

オレはバカだ。

大馬鹿推理之介だ。

蘭がいったこともあながち間違いじゃないんだな・・・。

ああ・・・。

だめだ・・・。

この前の出来事が改めてショックすぎて、行動に移せない。

あんなに決心したのに・・・！！

言い訳をすれば、前より副作用がひどくなったこともある。

もう、両親を騙すのも、警部達を騙すのもきつい。

どこかにひとりで行ってしまえばいいのだろうか。

それも行き倒れとかしたらいけないよなー、なんて考えてやめてし

まう。

ほんと、それなのに、悲しみを紛らわすためずっと事件現場に向かって・・・。

＊

「・・・ただいま・・・」

今日も両親はいない。

父さんと母さんには悪いが、よかった・・・。

事件の後であり、さっきからなんだかしんどいのですぐにソファに倒れこむ予定だったのだが、意外な出来事が起こった。

「新一君！帰ってきたんじゃない！」

「は？」

「あら、ひさしぶりね、探偵さん」

そこにいたのは、博士と志保だった。

「な、なんで？」

あまり大きい声をだすと、すぐ頭が痛くなったり、めまいがしたりするので、少し声を抑えて驚いた。

これは・・・厄介だな・・・かなり・・・。

「その様子だと、本当に探偵として事件の調査っていうのはうそじゃないみたいね・・・」

「ああ・・・まあ・・・」

「でも、あんなにMEDIAに出たがってたあなたが、まったく報道されてないのは、どういうわけかしら？」

ドキリとした。やば・・・。

まさか事件の調査中も体調不良で、それを誰にも知られたくない・・・宮野にも・・・なんていえないよな・・・。

「ちょっと？まだ組織の影に怯えてるってんじゃないでしょうね？もうあなたの話だと、完全につぶれたんでしょ？？」

志保が眉間にしわをよせた。

オレは必死に目の前で手を横に振った。

「ち、違うって。それは、ないよ」

「じゃあなんで・・・」

「まあまあ、新一君もそろそろ大人になってきたということじゃろう？」

大人になってきたって・・・。

しかし、突っ込みをいれてる場合じゃなかった。

辛くて、家具に手をつけてそれに重い体を委ねていた。

「そういえば・・・あなた風邪は治ったの？　なんだか変よ？」

オレは口に笑みを浮かべた・・・つもりだったが実際はどんなものかわからない。

「まあ、ちょっと。んじゃ、2階行ってくつから・・・。用はそれだけなのかよ？」

博士がにこりと笑う。

「実は優作君と有紀子さんに頼まれたのじゃ。なんだか様子がおかしいから、泊まっててくれってのう！」

「様子が、おかしい？」

「毎日ずっと、外を出ててせっかく帰ってきたのに寂しいってあったぞ。」

「ふーん・・・」

早く寝たい・・・！！！！

オレは何も言わず自分の部屋に帰っていた。

＊

・・・？

寝ていたオレは、博士と志保の悲鳴で目が覚めた。

どうやら、博士が作った料理を落としたらしいのだ。

あ、やべ・・・。

ご飯なんて、食べれるはずがない。

食欲が全くないのだ。

そのことをつたえなければ・・・。

もう、「食べてきたのだ」と、だから、「いらない」と・・・。

胸がきりりといったんだ。

オレはまた人を騙すんだ・・・。

もういやだ。

苦しい。

もう、見えない。

本当に、霞んで見える。

体の力が、ずっと抜けたかとおもうと、オレはその場に倒れていた。

「まあまあ、新二君もそろそろ大人になってきたということじゃろう？」

（後妻

ばれてしまうぞ・・・
W
W

オレが何度今慰めの言葉をいっても、彼女の涙だけは、止められないだろう。

「くど．．だいじょ．．？」

「はや．．きゅう．．よばないと．．．」

救急車．．．．？

そっかオレ倒れて．．．。

だめだ．．．。

病院にいったら．．．。

気づかれ．．．。

それでも体は動かない。

「ちょっと．．．救急．．．は．．．って．．．」

『ちよっと救急車は待って！』

・・・宮野??

まさか・・・おまえ・・・。

志保は倒れている新一に駆け寄り、額に手を当てたりした。

「・・・どい・・・つね・・・」

何言ってるんだ・・・。

博士の心配するような声が聞こえる。

もう、言葉は聞き取れなくなっていた。

＊

オレが目を開けたとき、彼らにこの前のような大きな安堵感はない。
った。

そして、急に起き上がる気力もなかった。

この3ヶ月で確実に体は蝕まれていたのだということを、思い知ら
される。

オレはさつきまでいたベッドの上。

・・・いや、ここは・・・。

わずかに薬品の匂いがした。

清潔感漂う白いシート。

静かで、誰もいないようだった。

そうだ・・・ここ・・・博士の家だ・・・。

どうやって運んだんだろ・・・。

そっか・・・オレ・・・。

「新一君」

少し、重い頭を傾けて、博士の姿を捉えた。

ずいぶんと久しぶりのように思える。

「・・・宮野は・・・?」

自然に出ていた。

博士は、下を向いて言いにくそうに口を開いた。

「今は・・・あわせる顔がないと言っておる・・・」

ああそうか。

もう、わかってんだ。

宮野も、博士も、オレも。

もう、これが副作用じゃないなんて、バカな考えはやめよう。

透き通るような声。

「工藤君」

宮野・・・・。

あえて、目はそらした。

合わせる自信がない。

博士は、パタンと扉を閉めた。

2人きり。

宮野の視線を、痛いほど感じる。

それでも瞳は伏せているまま。

宮野を、薬を作った本人に八つ当たりしそうになるのが怖かったからだ。

突然彼女は体を折り曲げ突っ伏した。

オレは、すぐに体を起こし、彼女に手を伸ばした。

「お、おい、大丈夫か・・・！？」

涙を流していた。

オレは驚いて何もいえなくなる。

絞り出すような声。

「ごめんなさい・・・っ・・・工藤君・・・全部・・・私のせいで・・・」

「な、なに言ってるんだ・・・お、おめえは悪く・・・」

彼女はさらに床に頭をこすりつけた。

「ごめんなさい・・・つつ・・・すべて・・・私が作った薬のせいよ・・・!!」

彼女は、初めて会ったあの時のように、枯れるほどに・・・もう、枯れ尽くしても、泣き続けた。

オレは、その様子をただ見ていることしかできなかった。

オレが何度今慰めの言葉をいっても、彼女の涙だけは、止められないだろう。

もう、あまり生きられないことは、あの毒薬の副作用の症状が出たときすでに分かっていたはずなのに。

もう一度、確認させられた気もした。

地下室からあがってくるオレを見た2人は、緊張した面持ちでいた。

眠い目をこすって、体を持ち上げると昨日このまま寝てたんだ、と気づいた。

白いベッドから、やせた足を出して立ち上がった。胸に手を当て、深呼吸する。

＊

地下室からあがってくるオレを見た2人は、緊張した面持ちでいた。

「ええと・・・寝てみたいだな、オレ」

この重い空気を破るように言った。

すると、黙っていた志保が「熱っ」と悲鳴を上げた。

博士がコーヒーを志保のコップに注いでいたのだが、溢れて彼女の手にあたったらしい。

「博士、なにやってんだよ・・・」

「す、スマンのお・・・」

博士は眉の下を下げて謝った。

「宮野に言えよ・・・」

2人に駆け寄る。

志保の白い手からはコーヒーが滴り、赤く腫れていた。

オレはその手を取り「大丈夫か」といった。

宮野がこっちを見つめてくる。

「工藤君・・・痩せたわね・・・」

「え？」

彼女は我に返ったように「大げさな。こんなのなんともないわ」、と手を払った。

急に、けたたましく電話が鳴り出した。

博士や志保から「あ・・・」という声が漏れる。

新一は怪訝そうな顔をした。

「なんだよ、とらないのか？」

「あ、ああ・・・でも、とるのは新一君のほうがいいじゃろ」

「・・・はあ？」

「優作君と有紀子さんだよ。」

地下室からあがってくるオレを見た2人は、緊張した面持ちでいた。(後書き)

みじかつ

やっぱりまだ熱があるのかもしれないと思った。

オレはやつと状況を呑み込んだ。

オレがいなくなって、電話も通じないが家に帰ったという形跡がある…。

まあ、まずお隣さんであって交友のある博士に電話するだろう。

その電話が今もくることを知っていたということは、昨日何らかの理由でうちにいることを伝え、明日また電話してきて欲しいとでも言ったのではないか…？

オレは立ち上がった。急だったせいか、すこし立ちくらみを起こした。

それを志保や博士に悟られないようになんとか体制を持ち直した。

やっぱりまだ熱があるのかもしれないと思った。

オレは受話器に手を延ばし、耳に当てる。

「はい…阿笠です…」

「もしかして、新ちゃん?？」

「あ、ああ…うん…母さん…?」

向こうで、安堵する様子がわかった。

「よかったー!新ちゃん…もう、なにやってたのよ!連絡も寄越さないでー。で、話って何?今から、そっち行けばいいの?」

「話?」

「だーかーらー、博士が昨日言ってたわよ。きょうは事情があつて新一君はここにきてるけど、それは明日新一君から話して貰うからのおつて。」

「あ、ああ。そうだったのか。ええと…」

2人を見ると、「もう少し待って」という類のジェスチャーをしていた。

「もうちょっとまってくれねえか?今度はこっちから掛けるから」

今度は、すこし相手が思案する様子が伺えた。

「わかった。じゃあ、またね」

やっぱりまだ熱があるのかもしれないと思った。(後書き)

短い

「あとのくらい生きれるかとかか？」

電話が切れて、オレはとりあえず座ろうと重い体を引きずった。

その様子を見て、志保がつぶやく。

「工藤君、まだ・・・調子悪いの？」

隠すことはできないと思った。

オレは額に手を当ててうつむいた。

「ちょっと」

志保が向かい側のソファに座る。

「今日からは・・・毎日朝健康診断をさせてもらうわ。・・・まあ、あなたがいつも健康でないことは分かっているけど・・・体温とか血圧とかをね。」

オレはまだ手を当てたままソファに倒れこんだ。

「ちょっと、工藤君・・・大丈夫？・・・博士、お願い。」

志保の言葉を聞いた博士が、少しあわてたようにタオルと氷を準備し始めた。

「そんな調子であなたの両親に話せるの？」

「・・・なあ、宮野。オレは何を話せばいい？」

「え？・・・もちろんあなたの今の体調のこととか・・・」

「あとのくらい生きれるかとかか？」

志保の顔に明らかに狼狽が走った。

博士も驚いたようにこっちを見ていた。

志保が、強く唇を噛んでいる。

自分はどうでもないことを言っているのだ、と分かっているながらももう後戻りはできない。

「・・・工藤君・・・これがあの薬の副作用だってことは・・・
あなたのことから分かってるわよね？」

新一はこくりとうなずいた。

「工藤君・・・あなたの様子をみると・・・このままじゃ・・・」

志保が顔をつらそうにゆがめる。

「せいぜいもって1年よ」

「あどどのくらい生きれるかとかか？」 (後書き)

みじか

宮野は、目を閉じてから、そっと手を伸ばし、オレを抱きしめた。

熱が上がってベッドの中でうずくまっていた。

ぼんやりとしてよく頭痛い。

だけど、さっきから、宮野の言葉がずっと反芻している。

……1年……か……。

これが長い年数なのか、短い年数なのかはよく分からない。

すべて自業自得である。

もちろんあのトロピカルランドの一件がなければ組織は倒せなかった。

そのことについて後悔することはまったくない。

このことをどうやって話せばいいだろう。

育ててくれた両親に、いつもとなりで支えてくれた服部に、お世話になった警部達に：

蘭に……………

あいつのことを考えると胸が苦しくなる。

前までは彼女が愛しくなっていたことだが、今はちょっと違う。

つらくて、どうしようもない喪失感が押し寄せるのだ。

＊

ばたばたとオレのために看病してくれる宮野に、「ありがとう」と一言告げた。

「オレ、弱いよな」

志保は、困ったような顔をする。

「でも、なんか受け入れられそうな気は少ししたよ」

今まで、死ぬこと前提に組織を倒そうとやってきたんだ。

受け入れることに躊躇していたのは、今は足りないものがあつた。

コナンとしていたときは当たり前のようにあつたもの……。

オレの言葉に彼女は驚きと安堵を見せた。

「彼女と何があつたのかは知らないけど、久しぶりに会つたあなたは、ずいぶん変わってたわ……」

一息つく。

「前からずっと細かったのに、さらに痩せて、顔も青白かった。

事件を解決したあとだろうに、達成感が殆ど見られなかった。

どこか、気持ち明後日の方に行つてい

た様だったわ」

「あんなあなた、みたことなかったから」

宮野は、目を閉じてから、そっと手を伸ばし、オレを抱きしめた。

・・・恐ろしく静かな世界。

息が苦しくなった。

永遠にこの時間が続いていくのだろうか。

ともかく、衝撃だった。

赤毛の混ざった金髪の女性が、自分を抱きしめている。

我に返った。

「・・・み、宮野・・・?」

顔は少しほてっている。

宮野の表情はよく見えない。

彼女は少しも動かなかった。

この地球にいるのは、たった二人きりであるように・・・恐ろしく静かな世界。

のどを少し鳴らした。その音も、吸い込まれるようにして消えてい

った。

まぶたを閉じようと思った。

そして、抱きしめたい。

すべてを忘れたい。

自然とどうしてだろう、とは思わなかった。

彼女の・・・宮野の行動には、僅かだが「まさか」と思わせるようなところがあったのだ。

馬鹿だ、オレは何考えてるんだろう・・・。宮野はただ、余命を宣告されたオレを、励ましてるだけ

だ。

なあ、工藤新一、分かってるんだろ？それに、ずっと思い続けているのは、蘭じゃないか・・・。

それは、変わらないはずなのに。

こいつを、手放したくない。

根拠はないけど、もう会えないような気がした。

宮野・・・いや、灰原・・・。

あの頃はもう去った。

コナンでいたころ。おめえが灰原でいた頃。

あのまま子供だったら、よかったのにな・・・。

言葉にできない想いが、頭の中をぐるぐるめぐつてく。

だんだんと体が燃えるように熱くなっていくのが分かる。

ゆっくりと、手を回しかけたそのとき、宮野の体がびくりと動いた。

「工藤君、ごめんなさい。ありがとう」

オレが声も出せぬままに、宮野は立ち上がり、部屋から出て行った。

わずかに髪の間から見えた横顔は、白い雪のように青白かった。

扉を閉めた音だけが、聞こえた。

今は、蘭のことは考えたくはない。しかしそれでいて、求めている自分がいる。

コナンのまま高校生になってから、オレは自然に灰原のことを「宮野」と呼ぶようになった。

その瞬間を、あの日宮野は、「全身の血液が逆流するような気分だった」と聞こえないくらい小さな声で言った。

目を開けて、そこには蘭と、宮野がふたり立っている。

もう、あの時間は過ぎ去ったんだ。

今はもう、いない。

＊

今日もまた朝が来た。

博士と宮野はまだ起きてきていない。

あたりまえだ、と思う。

まだ朝の6時だ。

玄関に行く途中、鏡があった。

立ち止まる。

コナンの時・・・高校生でいたとき、少し大人びた顔。

顔は細く、頬骨がくっきりと見えていた。

青白く、サッカーで少し焼けていたことが嘘みたいだった。

オレは、額に手をあててしゃがみこんだ。

ほんのり熱かった。

＊

事件は解決し、犯人は自首したが、やはり胸にしこりが在るような感覚が残っただけだった。

警部達は相変わらず笑顔で話しかけてくれるが、オレのそれはうまくいかない。

彼らが気を使ってくれているのは痛いほど分かった。

今はちょうど12時。胃からは空腹を感じない。

ようやく帰路についたそのとき、ある人影をみた。

短くそろえられた髪。細い体には、幼い頃から養われたと思われる独特の金持ちの「気品」が存在していた。身に着けているものはすべてひとめ見ただけで相当な値段だということが分かる。

そんな女性が、ありふれ、ごみごみとした都会の喫茶店にいるということ自体疑問に思うことなのだろうが、唯一それにおいて納得できる人物が新一の周りにはいた。

思わず、声をかけた。

「・・・園子・・・？」

彼女は振り向く。

その瞬間、深い後悔の念に襲われた。

今は、蘭のことは考えたくはない。しかしそれでいて、求めている自分がある。

その自分は、園子と関わることで、蘭をとりもどそうとしている。

そして、驚愕の瞳がそこにはあった。

彼女は一瞬顔をしかめて、「どうして・・・」とつぶやいた。

オレは、もう我にすぎる思いだった。

このままじゃ死んでも死に切れない。

彼女は目線を宙に泳がせた後、オレに手招きした。

とりあえずはほっとして、オレは園子に言われるがまま喫茶店に入っていた。

今時めずらしいウェイトレスは秋葉原のメイド喫茶にいるような服を着ていた。

なのに顔に化粧気は全くない。

園子が「私、ラテで」と簡潔に言った。オレも「ホットコーヒー」と、メニューも見ずにつぶやいた。

ウェイトレスが立ち去った後は、なんともいえぬ沈黙が訪れた。

園子は、少し緊張しているようだった。ほおづえをついて、下を向
きながら指で机をたたいたり、同じくほおづえをついているオレの
ほうにちらちら視線を送っていたりしていた。

案外早く注文したものが来たことが救いだった。

とりあえずコーヒーを啜ったが、あまりおいしくなかった。

ブラックコーヒーのくせに、あまり苦くない。

宮野のコーヒーはいつも苦すぎるくらいであったが・・・。

焦燥（前書き）

会いたくて震えてるわけではありませんよ笑

焦燥

園子が重い口を開いた。

「ねえ、工藤君」

オレはやっと顔をあげた。

何もかわってない。

あれから10年たったけど、世の中はほとんど何も変わっていないんだ。

オレはそれでもてこずってその10年を取り戻そうとしている。

「びっくりしたの。蘭のこともあったし、怒鳴りつけてやろうと思った。10年もたって今頃ノコノコ……。ほんとはね。ごめん」

オレはわずかに首を振った。

「でも、なんか変わってたから……」

オレが？

ああ、そうか。この容姿だったら……。

「蘭のこと傷つけたのは許せないけど、なにかあったなら、教えて」

「……蘭は？」

園子が、「え」と驚きの声を漏らした。

園子に、全部話すべきだろうか……。しかし親にも服部にも言っていないようなこと……。こいつに……。

オレが、組織と戦ったこと、そのせいで蘭と連絡も取れない状態になったこと、今はaptx4869という薬にやられて体調をくずしていること、余命を宣告されたこと……。

これを知ったら蘭は許してくれるのか？

園子は少しオレを咎めるような口調で言った。

「それは……。工藤君、蘭とはいまでも親友で、いろんなこと知ってるけど、教える気にはならないよ……。工藤君が納得したことと言ってくれないと。ねえ？今まで何してたの……？」

「連絡とろうにもとれなかったんだ」

思わず、口にだしていた。

「どういこと？それ……」

「おめえには話せないんだよ……。まだ宮野と博士にしか言っていないんだから……」

園子が身を乗り出すようにして聞いてきた。

「はあ？よく分かんない。宮野って誰？ちゃんと話して・・・」

オレは何考えてんだ。蘭のことは今もはや何も知らない。もしかしたら新井出先生と結婚してるかもしれない、家庭を作ってるかもしれない・・・。

もどかしさで手が震える。

唇を強くかんだ。そこから血があふれる。

オレらしくない・・・。何やってんだ・・・。もう寿命は短いというのに、分かっているのに、親にも親友にも伝えられていないなんて・・・。

「ちょっと、工藤君？」

肩で大きく呼吸しながら、「ごめん」の言葉をつぶやいた。

「オレ、こんなんだから・・・。今日はありがとう」

立ち上がる。

「工藤君！」

オレはポケットの中の財布から1万円札を取り出して、テーブルの上においた。

「じゃあ・・・」

喫茶店には、ほとんど人はいなかったが、店員達はオレたちの様子を口をあけてみていた。

「工藤君、私、言うから」

オレは気にせず歩き続ける。

「工藤君が今ここにいること。蘭に言うから。蘭、今新井出先生と付き合ってるみたいだけど、楽しそうにみえないの。最近様子もおかしかった。やっぱり工藤君のこと、好きなんだと思う。」

体がびくりと震えた。

心の中でそれが蘭にとっていいかどうかは分からないけどな、と毒づいた。

そして、薄い唇から溢れた血を指で軽くふき取った。

焦燥（後書き）

新一君、複雑です。

毒づいてるけど、嬉しいはずです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2879t/>

苦悩の工藤新一

2011年11月20日12時57分発行